

うたとかたりの対人援助学

第37回「みちのくの女たち 持続する志」

鵜野 祐介

序

大江健三郎は38歳の時に発表したエッセイ集に『持続する志』という題名をつけた。学生時代から小説家として活躍する一方、早くからヒロシマ、沖縄、核基地、憲法など社会的・政治的な発言を行い、集会やデモにも参加してきた彼は、このタイトルを選んだ理由について同書の冒頭に次のように綴る。

まず、ぼくの場合、学者としてその専門領域を鋭く限り、深めてゆくような人々とちがって、また実践家としてそのものの考え方を行動の壁をのりこえ、のりこえすることによって確実にし、タフにする人々とちがって、ひとりの小説家としてエッセイを発表してゆく人間には、自分の書くすべての文章に、歪みと崩れたバランスがあらわれればあらわれたなりに、またそれを回復し平衡をとりもどすことができれば、やはりそれなりに、持続した責任をとりつづけることのほかに、仕事のすすめようがないといわねばならないということである（「この本全体のための最初のノート」より）。

学者や実践家としての生き方や考え方を体現しつつも、小説家として歩いていくことを決意した大江は、三足の草鞋を履くことによって、自身の文章に「歪みと崩れたバランス」が表れようとも、「持続した責任をとりつづける」と宣言し、自らを鼓舞しようとした。そして88年の生涯をかけて「持続する志」を貫いた。

今年8月25 - 27日、岩手県と宮城県を訪ねて、

3・11を機に発足した立命館大学東日本・家族応援プロジェクト（村本邦子代表）の15年の活動の中でお世話になった方々と再会し旧交を温めた。小文では、その中から4人の女性にスポットを当てて、彼女たちの「持続する志」の源や原動力となったものは何かについて、インタビューを元に考察してみたい。（以下敬称略）

1. 遠野民話の語り手、大平悦子^{おおだいら}

初日（25日）の朝9時にいわて花巻空港に到着し、レンタカーを運転して、今回のフィールドワークの最初の訪問地、大平悦子のご自宅へと向かった。

遠野市青笹町に住む大平は、遠野で生まれ育ち、高校卒業と同時に東京の大学に進学。卒業後は神奈川県内で小学校教師をしていたが、小澤俊夫主宰の「昔ばなし大学」に参加し、語り手としての研鑽を積んだ。定年を待たずに退職し、語り手としての活動を本格的に始める。日本民話の会に所属し、全国各地さらには海外でも公演を行う他、DVDブック『大平悦子の遠野ものがたり』（悠書館2014）を刊行している。10数年前に、夫と一緒に遠野を生活の拠点に移し、離れには茅葺き屋根の古民家を移築して、果樹や野菜に囲まれて暮らしている。



（写真はたかむろ水光園の曲がり家で学生たちに民話を語る大平、2019年8月27日鶴野撮影）

私は2014年8月に宮城県丸森町で行われた「第9回みやぎ民話の学校」ではじめてお目にかかって以来、ゼミの学生たちや前述の村本プロジェクトメンバーの教職員や院生たちとコロナ禍前の2019年まで毎年のようにお会いしてきた。

語り部の活動をはじめてから20年、古稀を迎えることとなり、「集大成」ということを意識するようになったという大平は、佐々木喜善の民話集を元に、遠野の民話の再話集を出版することにしよう。

「日本のグリム」とも呼ばれる佐々木喜善は、柳田國男『遠野物語』（1910）の元となる話を柳田に語って聞かせたことで広く知られるが、自身でも1920年代以降、『江差郡昔話』（1922）、『老嫗夜譚』（1927）、『聴耳草紙』（1931）をはじめいくつもの民話集を刊行している。

喜善が書き残したのは標準語に「翻訳」したものである。例えば、3・11後に注目を浴びた、津波で妻を失った福二が翌年夏の夜更けに再会する話（『遠野物語』第99話）を、喜善は「縁女綺聞」（1934）に次のような冒頭文で綴る。

「遠野物語」にも其の大筋は載つてゐるが、極く私の近い親類の人で、浜辺に行つて居る人があつた。明治二十九年かの旧暦五年節句の晩の三陸海岸の大海嘯の時、妻子を失つて、残つた子女を相手に淋しい暮しをして居た。……

大平はこれを遠野の土地言葉に「翻訳」という。「むがーず、あつたずもな……」。そして、遠野の土地言葉と標準語が対訳されて、両方を比較しながら音読できるような体裁を取る予定だという。それによって地元遠野の子どもからお年寄りまで、それから遠野の言葉に馴染みにない人たちにも楽しめる「昔語りの本」が出来上がる。

20年も遠野の民話の語り続けてこられたのは何故か？ 今回、遠野の昔語りの本を出版しようと

思いついたきっかけは何か？ 私の問いかけに大平はこう答えた。——生まれ育ったこの遠野という土地が好きだからだと思う。佐々木喜善が遠野や周辺の民話をあれだけ多く本にしたのも、遠野を愛したからだと思う。

実は、喜善は作家を志して10代で故郷を離れて上京している。20代半ばに病氣のために帰郷し、民話蒐集の傍ら土淵村の村会議員、39歳には村長を務めたが、心労が重なり退職し、多額の負債を負い家財を整理し仙台に移住して、困窮の中、47歳で病没した。「ふるさとは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの」（室生犀星「小景異情—その二」より）を痛感した人生だった。

大平もまた、高校卒業とともに故郷を離れて都会で長く過ごし、喜善の心境は我が事のように感じられたに違いない。古稀を迎えて自分の人生の集大成を残したいと考えた時に、喜善民話の再話による「大平悦子の遠野昔語りの本」を構想したことは、ある意味で必然的な成り行きだったのかもしれない。

そして、大平における「持続する志」の源となったのは「土地の力」ではないか。遠野という土地の風土、歴史や文化や大自然が、そこに生まれ育った喜善や大平に与えた力なのではないかと思われる。

新著の刊行を楽しみにしたい。

2. 障害者支援施設わかたけ学園園長、^{さぎた}鷺田敦子

8月26日午前、プロジェクトのメンバー5人と一緒に、宮古市崎山の障害者支援施設わかたけ学園を訪問し、園長の鷺田敦子に話を聞いた。

2014年11月に東日本・家族応援プロジェクトの一員として宮古市を訪れた際、共催の一つである社会福祉法人若竹会・多機能事業所すきっぷの職員、当時30代初めだったという鷺田と初めて出会った。口数の少ない誠実な人柄という第一印象を受けた。それからコロナ禍が起こるまで、毎年11月上旬に現地を訪れたが、いつも丁寧な受け入れてくれたのが鷺田だった。

コロナ禍の間はリモートでお会いすることになり、その後、移動制限が解除されてからも私自身が体調を崩して訪問できなかったため、今回が8年振りの対面での歓談だった。

2011年3月11日、鷺田は職場の事業所で被災した。銚子地区にあった自宅は津波で流失したが、「家のことは気にせず、利用者さんのことを優先させなさい」という両親の言葉に従って行動した。

以来、配置換えや所属先の移動はあったが、この間一貫して社会福祉の現場で働いてきた。特に、震災直後の避難所では、ダウン症や自閉症などを抱えた利用者が精神的に不安定になって、パニックになり暴れ出したりトイレに閉じ籠ったりするのに対応するのが大変だったという。「ここを思いっきり噛み付かれました」と腕を見せながら笑って振り返った。

「どうしてこの仕事を続けることができたのでしょうか？ その原動力は何だったと思いますか？」私の質問に、鷺田はこう答えた。「周りの人のおかげです」。上司・先輩・後輩が、同僚として結束し、目の前の困難に向かって力を合わせて進んでいこうとしてくれたから、「それでも前に進めるものなんだ」と思えたのだと。特に、上司が背中を押してくれたことがありがたかったと、私もお顔を存じ上げているかつての上司・M氏の名前を挙げて微笑んだ。

広い敷地に約80名が長期入所している3階建ての施設を案内して下さった後、現在、学園長という管理職的な立場に置かれ、「これまでは経験しなかった種類の仕事に頭を痛めています」と笑いながら鷺田は話を結んだ。これからもきっと彼女は、周りの人の力を上手に引き出しながら、結束して、「それでも前に進め」ていこうだろう。そう確信して施設を後にした。



3. 宮古「学ぶ防災」語り手、佐々木純子

記録を繙くと、2015年11月に宮古市田老地区の「学ぶ防災」に参加した時、語り手として案内してくれたのが佐々木純子だった。強い潮風に吹き飛ばされそうになりながら、「万里の長城」と呼ばれた防潮堤の上で説明してくれた。それ以来2019年まで毎年11月にお会いした後、コロナ禍や私の病気などのためにブランクがあり、今回8年振りの再会だった。

15年間の「学ぶ防災」での活動を振り返り、変わったものと変わらないものの両方について語ってくれた。まず、変わったものは、見学者の客層である。特にコロナ禍以降顕著だが、国内エージェンツが撤退したためか、近隣の客が減り、海外や九州からの客が増えた。豪華客船のリッチな高齢の客も来るようになり、階段の乗降により一層気を配るようになった。

変わらないのは、震災遺構「たろう観光ホテル」の存在意義だ。これがあるから津波災害が起こったことを実感し、追体験することができる。

地元の子どもたちも参加してくれるが、知り合いの母親からこう言われたという。「自分は子どもに語らない。まだ語れないんです。だから純子さんに語ってもらえるととても嬉しい」。学校から「学びの防災」に参加してくれることの意義を感じたという。

学校や教師の役割が重要だが、熱心な教員とそうでない教員に分かれる。最近特にそういう傾向が強くなったと感じる。

もう一つ、変わらないものは、「伝承は人だ」ということ、人と人のつながりだと思う。

この仕事を続けて来られたのは、話を聞きに来られた方から、いろいろな質問を受けて、それにきちんと答えようと必死に勉強してきたからだと思う。参加された方それぞれが、異なる関心や疑問を持って質問される。年齢も被災体験の程度も国籍も違うし、歳月の経過も違う。その場その場で、臨機応変に語る内容も変えていかないといけない。参加された方と一緒に学んできた15年だった――。

佐々木の言葉に私は、みやぎ民話の会顧問の小野和子がよく話す「聞き手あつての語り手だ」という言葉が思い浮かんだ。

民話の「聞き手」として 50 年余りを過ごしてきた小野の、聞き手と語り手の関係性について綴った文章を、少し長くなるが紹介しておこう。

民話を語ってもらうとき、わたしはいつもその人の背後に、それを語った先祖の面影を見るし、その声を聞く。わたしのところまで、いま、語り手をとおしてきてくれている「物語」は、語る人の「単声」としては聞こえてこない。時代を経た無数の先祖の声であり、それは共同体とでも言うべきものの複数の声として聞こえるのである。

そして、語り手と聞き手のあいだには、（それが信頼しあつた仲であるときはいっそう）「親和力の漲った場所」とも言うべき空気が流れるのを何度か感じてきた。ふしぎに透明で独特な空気が流れ、それにうながされて語る人と聞く者は、手を携えて自由奔放に二人の世界へ入っていくのである（鶴野『うたとかたりの人間学』2023 p.373）。

合わせて、民話の「語り手」だった筒井悦子の言葉にも耳を傾けてほしい。

聞いている子どもの目や顔や体全体の表情から私に送られてくる無言のサインを私が聞き取ることができたとき、子どもの心は解放され喜びに満ちているように思います。子どものその喜びは、語り手が語ることによってのみ感じられるものです。『語ること』は私にとっての『ききみみずきん』だったのではないかと気がつきました」（同上 p.378）。

ここでは「語り手」と「聞き手」の立場が逆転し、「語り手」が「聞き手」となり、「聞き手」が「語り手」となる。「聞くこと」は、自分の外にある音や声をただ「聞く」ことではないと筒井は言う。「自分の内から外に向かって、ときには自分自身の内なる心に向かって意識的に耳を傾けて『聞く』ことこそ大切なことではないかと思っています」（同上）。

小野や筒井は、民話の「語る・聞く」世界について説明しているのだが、これは一般化することができるに違いない。

「学ぶ防災」という場においても、語り手と聞き手が出会い、互いに語らい、時に語り手と聞き手の立場を逆転させながら、「親和力の漲った場所」や「手を携えて自由奔放に二人の世界」へと歩んでいける。そのためにも、語り手の「聞く力」が求められるのだ。

佐々木にとっての「継続する志」の原動力は「聞く力」にあったと、私には感じられた。



結び

旅の終わりに、仙台に住む小野の家を訪れた。50 何年も民話の採訪を続けてきたのは何故かと聞いた。小野の答えは「馬鹿だからでしょう」だった。これに次いで、同席していたみやぎ民話の会の後輩（といっても 70 代）の加藤恵子と島津信子に向けて、「この人たちはまだ馬鹿じゃないのでダメなんです」と笑った。齢 92 の小野の言葉にふと「大愚良寛」が浮かんだが、これもまた、「だからダメなんです」と一笑に付されるに違いない。

